

J. S.ミルのフランス滞在：空白の一週間[§]
—再発見された新資料—
The Week-long Blank in J. S. Mill's Sojourn in France
—A Notebook Rediscovered—

井上琢智
INOUE Takutoshi

I はじめに

父J. ミルから驚くほどの早期教育を受けた息子「J. S.ミルの少年時代の最も重要な記録は、彼が15歳の時のフランス旅行の一部の間の記録である」。というのは、この日記は「彼の知識の真の特徴とその年頃の彼の知的能力をある程度正確に実証」¹⁾できるからである。

この早期教育の仕上げとなったフランス留学は、私的にも親しい交友関係にあった功利主義者ジェレミー・ベンサム—彼の功利主義の普及に努めたのがミル父子であった—の弟であり、工学上の発明の才能をもっていたポーツマス海軍工廠長官であったサムエル・ベンサム(Samuel Bentham, 1757-1831)²⁾の招待によるものであった。当時、彼は定年退職を機に南フランスに移住していたからである。

1819年7月30日、13歳になったばかりの息子ミルは、このサムエルに当時の学習状況を示す長文の書簡を送った。

「あなたにお会いしたのは…1814年、私たち一家がフォード僧院³⁾に滞在した最初の年だったと思います。私の勉学の進歩についてお尋ね下さって誠に有り難く思います」という書き出しから始まるこの書簡で、これまで、ユークリッドやニュートンの著作によって幾何学、一般数学を学び、13歳でプラトンの『国家』を学び、オランダ史、ローマ政治史を書いたと報告し、最後に「フランス語の勉強を始めるでしょう」⁴⁾と書いた。J. S.ミルにとってこの留学はフランス語の勉強を含む一種のグランド・ツアーであった。この手紙は、サムエル卿のミルに対する好奇心を満足させ、彼をフランスへ招くことになった。その期間は、当初6ヶ月の予定であったが、「一家の親切でほとんど1年近くにのびたのである」⁵⁾。

1820年5月15日、ロンドンを出発し、18日パリに到着。父ミルの紹介状を携え「セー法則」で有名なJ. B.セーを訪問、滞在した。27日にパリを立ち、6月2日午前2時にサムエル一家の住む南仏トゥルーズ近郊のポンピニアン城に到着。近辺を観光した後の6日からミルは勉強を始めた。ミルは図書館へしばしば通うなどしてヴォルテールなどのフランス文学を読み、また、フランス語で文章を書く練習をした。さらに微分学など数学の勉強やサムエルの息子で後年著名な植物学者・論理学者となったジョージからは植物学やフランス語を学び、フランス語の添削をも受けた。留学中、6歳年下のミルは兄のような彼から世話を受けたし、ジョージ自身もミルのフランス語を含む勉学の進歩を見守っていた⁶⁾。

8月10日、サムエル一家とミルはピレネー地方を旅行し、9月30日になってトゥルーズに戻った。その間、ミルは、ジョージとともに植物採取や昆虫採集をし、時にはジョージが植物学の講義をした⁷⁾。10月には、トゥルーズからモンペリエに移動し、その郊外の農場に住んだ。というのは、サムエルがこの土地の開拓に熱心に取り組んでいたからであった。11月中旬か

らミルはモンペリエ大学の公開講座に出席し、論理学、動物学などを学び、数学、フランス語、フェンシングの個人教授を受け、翌年4月までこの地で過ごした。このようにミルのフランス滞在は半年を越えて延長されたが、その延長を薦めたのは、ベンサム夫人からJ.ミル宛の以下で示す9月14日付けの書簡であった。

「拝啓 2週間以上前に当地から出した手紙の始めで、ジョンのフランス語の進歩と、彼がフランスに来て以来習っていたその他の部門の勉強とその成果についてお知らせしましたが、それは、あの子がトゥルーズからあなたのもとに帰るか、それともこの冬も私どもと一緒に暮らすかについて、あなた自身に決めていただきたかったからです。…あの子をすぐに帰すようにというあなたのお手紙が折り返し届かない限り、あの子をモンペリエにつれて行きます」⁸⁾。

このようにしてミルのフランス滞在は継続され、サムエルと別れてミルがパリに戻ったのは翌年の4月末であり、その際再びセー宅に立ち寄り、その後カーンに父J.ミルの友人ラウ(Joseph Lowe)を訪ねて数週間滞在し、帰国したのは7月であった。

このように、一年を越えるミルのフランス旅行について、父ミルは、経済学者デビッド・リカード宛の手紙(1821年8月23日付)で次のように書いた。「ジョンが何週間か前から家に戻っています。非常に大きくなりました。ほとんど一人前にみえます。ですが他の点では出かけた時とあまり変わっていません。彼はフランス語を覚えました—しかし自分の国の言葉はほとんど忘れてしまいました—そして以前とほとんど同じくらいに恥ずかしがりやでさげすまれません。しかし彼の好奇心は残っており、素直さと良識を見せています。彼は、フランス人の言う愛想のよい人間にはならないとしても、イギリス人の言う気立てのやさしい、役に立つ人間にはなるだろうと確信しています」⁹⁾と。

いずれにせよ、このフランス旅行は、ミルの成長に大きく貢献し、「ある意味では、この旅行は、ミルが53年後にアヴィニオンに葬られるまで終わらなかった。なぜなら、彼は、生涯を通じてフランスとの接触を新たにする毎に、人間とその相互関係について、より深くより刺激的な知識に導かれたからである」¹⁰⁾。

II 滞在日記の二種類のノートについて

J. S. ミルは、このようなフランス滞在の状況を、父J.ミルの指示に従って、日記に書き留めただけでなく、その日記をもとに清書し、書簡として①6月2日、②6月16日、③6月24日、④7月4日、⑤7月11日、⑥7月19日、⑦8月2日、⑧9月10日、⑨10月5日、⑩10月18日、⑪10月28日、⑫11月21日までの12回に分けて父ミルに送った。これをもとにベインは*John Stuart Mill: A Criticism with personal recollections* (1882)の中で、ミルのフランス滞在の状況を書いた¹¹⁾。この書簡は、J. S. ミルの妹クララ(Digweed, Clara Esthera<旧姓 Mill>)によってブリテッシュ・ライブラリー(Add. MSS 31909 <Journal>)へ寄付されたものである。その記述期間は、5月15日から始まる第1書簡から第3書簡までについては、その全文が英語で書かれ、第4書簡から第6書簡までについては、日付・住所等の前文がフランス語で、本文は英語で書かれている。また、8月2日で終わる第7書簡については、その全文が英語で書かれており、8月26日から始まる第8書簡から10月13日で終わる12書簡までについては、その全文がフランス語で書かれている¹²⁾。ところで、この『日記*Journal*』と呼ばれる清書された書簡のもととなった下書きはどこにあるのだろうか。

『日記』ノートの一冊が、アンナ・ジーン・ミル(Anna Jean Mill)により1956年に購入され、現在、スコットランドのセント・アンドリュース大学図書館(MS 37865 <notebook>)

に寄贈されたものである。このノートは、51葉で、その内27葉が日記に当てられており、その記述期間は、1820年5月15日から6月1日までと、8月10日から1821年2月6日までである。前半は英語で、後半はフランス語で書かれている¹³⁾。アンナ・ミルはこれら二つの資料を用いて *John Mill's Boyhood Visit to France, being a journal and notebook written by John Stuart Mill in France, 1820-21* (1960) を編集・出版した。

これら二種類の資料を用いて編集されたのが、*Journals and Debating Speeches, The Collected Works of John Stuart Mill*, vol. XXVI (1988) である¹⁴⁾。しかし、これらブリテッシュ・ライブラリー所蔵『日記』とセント・アンドリュース大学図書館の『日記』ノートだけでは、ピレネー旅行出発直前の8月3日から9日までの記述は空白のままである。それゆえ、これまでは、これら資料に基づいてJ. S.ミルの「レッスンは8月の初めに終わった」¹⁵⁾とされてきた。ところが、今回、関西学院大学図書館が2001年2月に購入した『日記』ノートには、この空白の1週間を埋める記述が含まれている。この関西学院大学図書館所蔵『日記』ノートは、全部で42葉から成っており、そこには、7月20日から9月15日までの『日記』ノートと雑録とが含まれている。その内、『日記』ノートは、第1葉表から第11葉裏までに7月20日から8月21日までの日記が、さらに第13葉表から第14葉裏までに8月22日から26日までの日記が、第15葉表に26日の続きが、第17葉表から第27葉表までに8月27日から9月15日までの日記が含まれており、その内、7月20日から8月11日までの日記は英語で書かれており、8月11日の後半から9月15日までの日記はフランス語で書かれている。

その第一の特徴は、すでに指摘したように従来之二資料には欠けている8月3日から9日までの記述が見られることである。さらに、第二の特徴は、8月10日の日記が、セント・アンドリュース大学所蔵ノートでは全文フランス語で書かれているにもかかわらず、関西学院大学図書館所蔵『日記』ノートでは英語で書かれていることである。また、11日の日記は、セント・アンドリュース大学所蔵ノートでは全文フランス語で書かれているにもかかわらず、関西学院大学図書館所蔵『日記』ノートでは、最初は英語で、後半がフランス語で書かれていることである。第三の特徴は、関西学院大学図書館所蔵『日記』ノートの内、フランス語で書き始められた最初の5日分（8月12日から16日）の日記には、ジョージ・ベンサムと思われる人物による添削が施されているが、8月16日以降9月15日までの日記には、ミル自身と思われる人物による訂正がなされていることである¹⁶⁾。

これら三種類のミルのフランス滞在『日記』およびその二種類のノートとの関係を全体的に示すと以下ようになる。なお、対照表中の *E* は、日記の本文が英語で書かれていることを示し、*F* は日記の本文がフランス語で書かれていることを示している。

J. S.ミル「フランス滞在日記」対照表

1820	St. Andrews Univ. Lib.	KG Univ. Lib.	British Lib.
May 15	<i>E</i>		<i>E</i>
			Letter 1 (June 2)
June 1	<i>E</i>		<i>E</i>
2			<i>E</i>
			Letter 2 (June 16)
16			<i>E</i>
17			<i>E</i>

				Letter 3 (June 24)
	24			<i>E</i>
	24			<i>E</i>
				Letter 4 (4 Juillet) ¹⁷⁾
July	3			<i>E</i>
	4			<i>E</i>
				Letter 5 (11 Juillet)
	11			<i>E</i>
	11			<i>E</i> (11 日の続きの日記)
				Letter 6 (19 Juillet)
	19			<i>E</i>
	20		<i>E</i>	<i>E</i>
Aug.	1			Letter 7 (August 2)
	2			<i>E</i>
	10	<i>F</i>		
	11			
	12			
	26			<i>F</i>
				Letter 8 (10 Septembre)
Sept.	2			<i>F</i>
	3			<i>F</i>
				Letter 9 (5 Octobre)
	12			<i>F</i>
	13			<i>F</i>
	15		<i>F</i>	Letter 10 (18 Octobre)
	17			<i>F</i>
	18			<i>F</i>
				Letter 11 (28 Octobre)
	30			<i>F</i>
Oct.	1			<i>F</i>
				Letter 12 (21 Novembre)
	13			<i>F</i>
1821				
Feb.	6	<i>F</i>		

その他、この関西学院大学図書館所蔵『日記』ノートには、旅行先の地誌・地理メモ、金銭出納表のメモ数葉、またジョージ・ベンサムから学んだ植物学に関する学習メモが数葉、さらにセー宛書簡の下書きなどが含まれている。とりわけこのセー宛フランス語書簡の下書きについては、現在公刊されている『J. S. ミル著作集』¹⁹⁾での初出の英語書簡が1830年3月2日であり、セー宛書簡の初出がほぼ10年も溯ることができると考えるとき、この下書きの価値はきわめて高いといえる。

III 翻 刻

「J. S.ミルのフランス滞在日記」の今回の翻刻は、ミルの一年有余におよぶフランス滞在中にあってこれまで資料上の制約からまったく空白であった1820年8月2日から9日までの一週間に限って翻刻・公表することにする。ただし、文脈の関係上、8月1日および2日についても翻刻し、ブリティッシュ・ライブラリー所蔵のJ.ミル宛書簡である『日記』との異同を明記する。

August 1820

August 1.

Mr. George was so occupied in packing that he could ^(a)neither^(a) go to bathe nor ^(b)take^(b) riding lesson; I ^(c)went without him to the latter, after having continued^(c) the division of France and ^(d)commenced ^(d) the statistical part of my Cahier. ^(e)Took solfeges lesson^(e), did not breakfast; was informed that we ^(f)should probably set off for^(f) our tour on the ^(g)3rd ^(g); received my clean linen, ^(h)gave ⁽ⁱ⁾ dirty linen to be ⁽ⁱ⁾washed; retranslated Lebeau^(j)21), learnt by heart part of a French fable; ^(k)began to write out the account of my journey from London; ^(k) to M. Sauvage²²⁾ ^(l), ^(l) read with him part of the ^(m)two treatises^(m) on Construction and on Pronunciation; music lesson; dined; ⁽ⁿ⁾was informed that we should⁽ⁿ⁾ not be able to set off before the ^(o)fourth^(o).

August 2.

Mr. George ^(p)was^(p) obliged to have a tooth drawn, ^(q)so that^(q) we did not go to bathe. Took^(r) riding lesson^(s), ^(s)breakfasted, solfèges, finished learning ^(t)the^(t) fable, continued account of journey; to M. Sauvage, read with him part of the treatise on Pronunciation; fencing and music lesson, ordered a new pair of shoes; dined, finished account of journey ^(u)complete with accounts of the towns I have passed through, taken from memory and from theitinaire^(u). If I had taken the precaution of keeping copies of the letters I have written to ^(v)my father^(v) since the first ^(w)exclusive, I should have my journal^(w) complete from my arrival in France. ^(x)Took^(x) fencing and dancing lessons^(y). ^(y)We shall not ^(z)set out till the fifth.^(z)

注²⁰⁾

(a)-(a) not

(b)-(b) to

(c)-(c) wrote still more of

(d)-(d) began

(e)-(e) To the maége; sofége,

(f)-(f) were to set on

(g)-(g) 3rd of August

(h) and

(i) the

(j)-(j) cleaned; began to write out the account of my journey from London; rewrote the translation of Lebeau

- (k)–(k) omitted in BL version.
- (l)–(l) ;
- (m)–(m) two Treatises
- (n)–(n) continues account of journey, fencing and dancing lessons. I understand we shall
- (o)–(o) 4th
- (p)–(p) being
- (q)–(q) omitted in BL version.
- (r) my
- (s) ;
- (t)–(t) omitted in BL version.
- (u)–(u) with descriptions of the towns I pass through, etc.
- (v)–(v) you
- (w)–(w) (for of that I had already an abstract) my journal would be
- (x)–(x) In your next letter I would be much obliged to you to let me know if you have all the letters safe, since if you have them not I will endeavour to recollect as well as I can what took place from June 2 to July 20. The things of importance I certainly recollect; the only things will not be easy will be to make out a precise journal of each day. This will be a goog deal by guess, for it can be no otherwise.- To
- (y)–(y) ; return home.
- (z)–(z) be able to set off before the 5th of the month. This letter is number 8[#]. (# Actually No. 7.)

August 3.

To the river in the morning; Mr. George on the poney there; myself and William²³⁾ behind the cabriolet. There are two islands at the place we bathe and the river is thus divided into three branches, we have hitherto made trial of two only. After a very pleasant bathe, we are called out of the water by the noise that the horses had got loose and galoped to the town. Mr. G. and William Russell²⁴⁾ walked back to the gate, and received them as they had been stopped there. Myself with Richard and Francis. Russell, walked home down the left bank of the river, a very pleasant walk. After breakfast, finished letter No. 8²⁵⁾, and learnt another French fable. Fencing lesson, to M. Sauvage, read with him some of Lafontaine's fables²⁶⁾, returned home, read alone some of the same author; wrote out a small portion of my dialogue on government²⁷⁾, dined, read Lafontaine, took fencing lesson, went to bed, being much fatigued by the heat. Today is the Fête St. Etienne²⁸⁾

August 4th.

Did not go to the river, began to write out a list of the places we shall pass through in our journey, Mr. G. packing, he sent me too soon to riding lesson, ; after waiting a long time in the promenade, I return home, but went again soon after solfèges, breakfasted, read Lafontaine and the itineraire, received clean linen, gave dirty linen to be washed; to M. Sauvage, read with him some of the treatise on construction, took fencing lesson, returned to dinner, a change of weather, much rain, packed up sac de nuit for tour,dancinglesson, to M. Larrieu's²⁹⁾, who was not at home, returned

through a heavy shower of rain, all the family out except Madame de Chesnel³⁰, practiced music a good deal, received a visit from the young ladies at the Pension, more to my own benefit than to theirs as the mistress was not very well pleased. Drank tea on the return of Sir S. and Lady B.

August 5.

To Dr. Russell's in the morning, but the weather not being fine, he would not go to bathe. Returned home, began to pack my trunk; I understand we shall not be able to set off till tomorrow morning, riding lesson; Sir Samuel and Mr. George were from home; solfèges; read Lafontaine and Boileau³¹; breakfasted at 11 o'clock; to Mr. Sauvage; read with him some of the Treatise on Pronunciation; fencing lesson, dined; Sir S. B not being well, we shall not be able to set off tomorrow; charaban returned from the coachmaker's; read Boileau, to Dr Russell's, to dancing lesson, home to tea, Sir Samuel much better, we shall probably set off early on the morning of the 7th.

August 6.

To the river in the morning; the water was extremely high and of the color of chocolate; I did not ford it as usual, while we were there a man came to tell us that the lady who is the undertaker of the pouchette concern would have our procès verbal made out if we drove the carriages up to the river side so near her grounds, and if we did not depart immediately. But he soon returned to tell us that this formidable message was not sent by the Lady herself but by a man who is half mad and that we might therefore stay. Returned home after bathing; my shoes came from the shoemaker's; Breakfasted, read Lucian's³² dialogue between Saturn and the priest; and his Soloecista also; read Boileau and Lafontaine; our departure is put off for a day or two more which threatens un [...] *during the confusion of packing, even more so than at Pompign [...] as this house compared with the Chateau is like an ants nest and so besides unaltered with the consolatory circumstance of a large park.*-- Mr. George has given room for my insects in one of his boxes. After dinner went with him to the theatre, understood almost all; pieces, les Deux Chapeurs et la Laitière taken from Lafontaine's two fables, les Deux Compagnons et l'Ours, and la Laitière et le Pot au Lait³³; pretty enough opera, la Famille Sirven, ou M. de Voltaire a Castres a beautiful melodrame; and Le jeune Werther, ou les Fortes Passions³⁴, an amusing parody on the violent passions given in many plays to lovers. Returned home very well satisfied with the entertainments, supped, everyone gone to bed except Miss Clara³⁵.

August 7.

Did not wake early enough to go to the river; Mr. George packed up, I read Boileau, breakfasted, was informed that we should probably set off early tomorrow morning; received clean linen, sent dirty linen to be washed, packed up sac de nuit, began to pack up my trunk, to M. Sauvage, finished with him the treatise on construction; fencing lessons; home to dinner; we shall not be able to set off till tomorrow evening, or early in the morning of the 9th; Mr. George continued packing; to Dr Russell's; fencing and dancing lessons, returned to tea.

August 8.

Mr George packing or riding about the town all day; read new papers; to M. Sauvage, but being occupied, he could not give me any lesson. We shall not set off till tomorrow. Took fencing lesson; dined; went with Sir Samuel Bentham, Mr. George and Miss Clara, to the Hotel de Ville called the Capitole; obtained our passports, went over the building, saw rare old manuscript archives of Toulouse accompanied by paintings very well drawn the age (date), being the beginning of the seventeenth century. Some of the rooms are very magnificent, particularly one in which is a throne destined for the king when he passes through Toulouse. Saw the apartment where the annual prizes of the [...] are given to the authors of the best pieces of poetry; these prizes are flowers of gold. The institutor of these games is said to have been a woman named Clemence [...], whose statue is in the apartment, and has a new crown put on its head every year. Saw the axe with which Montmorency was beheaded. Dancing lesson, called on Dr Russell's sons to take leave of them, they gave me a few shore insects; home to tea.

August 9.

Unwell in the morning, took medicine, read a book entitled Tableau Historique de l'Esprit et du Caractere des lettres [...] Francais depuis la renaissance des lettres³⁶⁾. About 12 o'clock, Sir Samuel and Lady Bentham³⁷⁾, Madame de Chesnel, Miss Clara, and Adele, went off in the carriage. The rest of us are to remain till tomorrow morning in order to settle everything with Madame de Benot³⁸⁾.

IV おわりに

これまで、「8月の始めに<J. S. ミルの>レッスンは終わった」とされてきた。しかし、今回再発見された『日記』ノートによれば、J. S. ミルはピレネー旅行出発の10日前日の9日まで、これまで通り規則正しい読書、フランス語の勉強はもちろん、「統治論に関する対話」と呼んだエッセーを書いただけでなく、ダンスやフェンシングを習い続け、旅立つ直前の6日には、観劇さえしていたということが明らかになった。まさに、この「空白の一週間」もまた、一日たりともおろそかにしないJ. S. ミルの「少年時代の勉学についてのわれわれの手にすることのできる最善の記録」の一部であり、関西学院大学図書館所蔵『日記』ノートの全容が公表されることによって、その全貌が明らかになるであろう³⁹⁾。

【注】

- 8) 本研究は、関西学院大学個人特別研究費（2001年度）および科学研究費補助金(C)(2)（2002-2003年度）による研究成果の一部である。また、本稿の英語版は、その内容に多少の相違があるものの、*Notes and Queries* の2005年3月号に収録される予定である。
- 1) Bain, A. *John Stuart Mill: A Criticism with personal recollections*, 1882, pp. 5-6 (山下重一・矢島杜夫訳『J. S. ミル評伝』御茶の水書房, 1993, 8頁)。
 - 2) サムエルは、ロシアの海軍に勤務した後、イギリスの海軍工廠でさまざまな発明をした技術者で、1812年に退職し、フランスに移住した。ミルによれば、「サムエル卿は、彼の有名な兄<ジェレミー・ベンサム>とは、性格のちがう人だったが、非常にすぐれた学識もあり、一般的にも能力に富んだ人で、機械の技術にかけては明らかに天才だった。奥さんは、有名な化学者フォードイス博士のお嬢さんで、意志も強くはっきりとした個性の持主であり、一般的学識にも富み、エッジワース型の実際の良識も多分にそなえていた。家はもっぱらこの奥さんが切り回していたが、それだけの値打ちも資格も十分そなわった婦人であった。一家には、息子一人（著名な植物学者である<George Bentham, 1800-1884>）とお嬢さんが三人おり、その一番下の人<Sarah>が、私より二つくらい年上だった」（*Autobiography and Literary Essays, Collected Works of John Stuart Mill*, vol. I, 1981, p. 59<朱牟田夏雄訳『ミル自伝』1976, 岩波文庫, 57頁>）。
 - 3) フォード僧院とは、ジェレミー・ベンサムが賃借し、別荘として使っていた中世の僧院であり、ミルは「1814年から17年まではベンサム氏は毎年の半分を、サマセットシャの…フォード僧院で過ごし、その期間は私もそこで過ごす特権を与えられた。ここに逗留したことは私の教育上重要な意味を持った」と書いている（*Autobiography and Literary Essays*, p. 57（朱牟田夏雄訳『ミル自伝』56頁））。
 - 4) Bain, A. *op. cit.*, pp. 6-9 (reprinted in *The Earlier Letters of John Stuart Mill, 1812-1848, Collected Works of John Stuart Mill*, vol. XII, 1963, pp. 6-10, 山下重一・矢島杜夫訳『J. S. ミル評伝』9-13頁)。
 - 5) *Autobiography and Literary Essays*, pp. 57, 59（朱牟田夏雄訳『ミル自伝』57頁）。
 - 6) “Excerpts from George Bentham’s Manuscript Diary Journal, 1820-21” (Anna Jean Mill, *John Mill’s Boyhood Visit to France*) によれば、「ミルは夜2時に到着」（6月1日付けの最初の日記）、4日には「ミルはラッセル博士と経済学について長い議論」をした。26日以降、ジョージはミルにフランス語を授業し、8月16日には「ミルの<フランス語>の練習を添削」した。その前日には「夕方、最初の植物採取」を行い、19日には「植物学の講義」を行っている。その他、ミルのフランス語修得について、ジョージは、その『自伝 *George Bentham: Autobiography, 1800-1834*』(ed. by M. Filipiuk, 1997) の中で「この時に書いたノートには、ミルのフランス語の急速な進歩についてのメモを見出されるし、私をも困らせた難しい代数の問題に容易に答えられた」(p. 63) と書いた。この植物学の講義についても同書 (pp. 60-70) を参照のこと。ミルのベンサム一家訪問について、ジョージは「彼の訪問は、また多くの点で私たちにとって楽しいことであつたし、私たちとともに過ごした7ヶ月から8ヶ月の間、彼の行動、性格、基本的な考え方に満足するに十分な理由があつた」(p. 63) とまで書かせた。
 - 7) *Journals and Debating Speeches, Collected Works of John Stuart Mill*, vol. XXVI, 1988, pp. 65-66 (山下重一訳「フランス留学 (1820-21)」杉原四郎・山下重一訳『J. S. ミル初期著作集』1, 御茶の水書房, 1979, 46-48頁)。
 - 8) *John Mill’s Boyhood Visit to France*, pp. 65-66 (山下重一訳「フランス留学 (1820-21)」49-50頁)。
 - 9) Sraffa, P. (ed.), *The Works and Correspondence of David Ricardo*, vol. 9, 1973, p. 43 (中野正監訳『デイヴィッド・リカード全集 書簡集』第9巻, 雄松堂書店, 1975, 46頁)。
 - 10) Iris W. Müller, *John Stuart Mill and French Thought*, 1956, p. 3 (山下重一訳「フランス留学 (1820-21)」32頁)。
 - 11) ベインがこれら書簡を用いて書いた明確な証拠は、J. ミル宛第5書簡の日付（7月4日、5日、6日、7日、8日、9日、10日、11日）を、ミルは誤って（7月4日、5日、6日、7日、9日、

- 10日、11日、12日)と書いているが、この誤りをベイン自身も犯していることである (pp. 19-20<邦訳も同じ誤りを犯している [22-23頁]>)。この誤りは7月16日まで続いている (*Journals and Debating Speeches*, p. 41)。
- 12) ただし、第8書簡、第12書簡で、日付・住所および父宛が本文の冒頭に書かれているが、第9書簡・第10書簡では、本文の最後に付けられている。
- 13) ただし、9月22日および9月30日については、J. ミルに送付された『日記』には、記述が見られるものの、このセント・アンドリュース所蔵ノートには、何ら記述が見られない (*Journals and Debating Speeches, The Collected Works of John Stuart Mill*, pp. 107 and 112)。
- 14) *Journals and Debating Speeches*, pp. 1-143.
- 15) Bain, A. *op. cit.*, p. 21 (前掲書『J. S. ミル評伝』24頁)。
- 16) ジョージによるフランス語の添削については、注6を参照のこと。それによれば この『日記』ノートであるか不明にせよ、少なくとも8月16日には添削をしていることになる。
- 17) この第4信から第6信までは、フランス語の前文(対照表の「月」の表示がフランス語の場合)で始まり、続いて日記本文が英語で書かれている。また、第8信(注18を参照のこと)から第12信までは、日記本文および後文ともにフランス語である。ただし、第12信では、前文の後に日記本文が書かれており、ともにフランス語である。
- 18) 『ミル著作集』は、8月10日から25日までの日記をセント・アンドリュース草稿から起こして「日記8」としている。しかし、本論文では、ブリテッシュ・ライブラリー所蔵書『日記』に従って、この箇所 (*Journals and Debating Speeches*, pp. 61 <10 Août>71<25 Août>)を除いて、通番とする。
- 19) *Additional Letters, The Collected Works of John Stuart Mill*, pp. 9-11.
- 20) この注で示された異同は、関西学院大学図書館所蔵『日記』ノートを定本に、『ミル著作集』に翻刻・収録された資料と比較した結果である。なお、『ミル著作集』に翻刻・収録された資料とブリテッシュ・ライブラリー所蔵の原資料との間、また、前者と筆者の翻刻との間には、若干の相違が見られるが、その点については、本資料を全文翻刻する際に明示する予定である。なお、今回の翻刻に際して、この貴重な資料の閲覧・利用を許可していただいた関西学院大学図書館、さらにこの資料のデジタル化を担当していただいた関西学院大学総合教育研究室の深井純氏、原資料からの翻刻を直接担っていただいた Olivia Kennedy 氏に深く感謝いたします。
- 21) Charles Lebeau (1701-78) のことであり、その著作には、*Opera latina (1782-85)*, 2nd ed., 2 vols. (Paris: Delalain, 1816) がある (*Journals and Debating Speeches*, p. 722)。
- 22) フランス滞在中の J. S. ミルのフランス語の教師である (*Journals and Debating Speeches*, p. 40 n. 6)。
- 23) ウイリアム (William) は、フランシス (Francis) およびリチャード (Richard) とともに W. T. ラッセルの子どもでもある (*Journals and Debating Speeches*, p. 33 n. 6)。
- 24) William Thomas Russell (b. 1776) はアイルランド人で1802年結婚後トルーズに移住し、多くの子どもを育てた。その内、3人の息子は東インド会社に入社した (*Journals and Debating Speeches, The Collected Works of John Stuart Mill*, p. 19 n. 3)。
- 25) ここでも、番号を誤って「書簡8」としている。実際は、8月2日付けで、3日に書き終えた「書簡7」である。
- 26) La Fontaine, Jean de, *Fables choisies mises en vers*, Paris: Thierry, 1668 のことである。
- 27) 1820年6月16日の『日記』最後に「政治」「教育」「人口統計」の文書を付しているが、8月3日には、このように「統治について対話」(*Journals and Debating Speeches, The Collected Works of John Stuart Mill*, p. 679)と題するメモを書いたことは注目に値する。というのは、7月11日前半の『日記』によれば「父からの手紙で、ペンサム夫人が彼を非常に誉めていると知らされる。父の手紙に記せられていたことを十分に答えて返事を書く。父の統治に関する論文のことを聞いて喜び、帰国したら十分に注意して読むことを約束する」(*ibid.*, p. 45. また、Bain, A., *John Stuart Mill*, p. 20<山下・矢島訳『J. S. ミル評伝』23頁>を参照のこと)と書き、それが最終的には

『統治論』に関する方法論争や女性の参政権問題へのミルの取り組みを生み出すことになったからである。

- 28) the Ftè St. Etienne については不明である。
- 29) M. Larrieu (or M. Layrieu) とは、6月27日から始められたミルのダンスの教師である (*Journals and Debating Speeches*, p. 34 n. 11)。
- 30) Marquis de Chesnel 夫人とは、S. ベンサムの長女メアリ・ルイス (Mary Louisa, 1797-1865) のことである。
- 31) Nicolas Boileau-Despreaux (1636-1711), “Poesies deverses et epigrammes” であろう (*Journals and Debating Speeches*, p. 34 n. 15)。
- 32) Lucian については不明である。
- 33) このラ・フォンテーヌの二つの寓話の内、前者の正しいタイトルは、“L'Ours et les deux Compagnons” である。
- 34) la Famille Sirven, M. de Voltaire a Castres とは、おそらく1761年のシルヴァン事件を素材にした劇のことであり、Le jeune Werther, les Fortes Passions とは、おそらくゲーテの『若きウェルテルの悩み』を素材にした劇のことであろう。この点については、一橋大学社会科学古典センターの山崎耕一氏のご教示によるものである。なお、山崎氏には本稿をその草稿段階できわめて丁寧にお読みいただき、多くのご指摘をいただきましたことを感謝申し上げます。
- 35) S. ベンサムの次女でクララ (1802-29) である。
- 36) Antoine Tailfer, *Tableau historique de l'esprit et du caractere des litterateurs franis depuis la renaissance des lettres jusqu'en 1785; ou recueil de traitis d'esprit, de bons mots & d'anecotes litteraires* (1785) のことである。
- 37) S. ベンサムの妻 Maria Sofhia (旧姓 Fordyce, 1765-1858) である (*Journals and Debating Speeches*, p. 8 n. 13)。
- 38) Madame de Benot については不明である。
- 39) 最後にこの関西学院版の『日記』ノートの購入経過について言及しておく必要がある。この『日記』ノートは、1922年3月29日、ロンドンのサザビーで競売に付されたメアリー・テラー (息子ミルの養女ヘレン・テラーの姪) の遺品21点 (競売番号721から同732<*Catalogue of Valuable Printed Books, Illuminated Manuscripts, Autograph Letters, and Historical Documents*, pp. 87-89>) の一つであった。その競売番号「727」が付けられた遺品は三冊からなり、その第一冊目がジュールゴンヌによる講義のノート (今日では *Journals and Debating Speeches* <pp. 145-253> に採録されている) で、現在はアメリカのピアポイント・モーガン図書館が所蔵し、第二冊目、第三冊目が『日記』ノートで、その第二冊目は、当初、アンナ・ミル氏が購入し、その研究成果を *John Mill's Boyhood Visit to France* として世に問うた。その後、このノートはセント・アンドリュース大学図書館所蔵となった。しかし、第三冊目のノートは長らくその所在が不明であったが (サザビーで競売された後の所有者の変遷は現段階では明らかにできていない)、2000年秋に関西学院大学図書館が「特別図書購入」費により購入し、その蔵書となったものである。本図書館が購入した資料が、この三冊目のノートであることを示すのが、本資料に付けられた「727の3」と書かれた紙片である。この紙片が本資料がミルの直筆であると判断した一つの傍証である。加えて、その信憑性は三種の資料の筆跡およびその内容の重複、彼の『自伝』の内容との符合、さらにはジョージ・ベンサムの『自伝』の内容などを総合的に判断した結果である。

(関西学院大学経済学部教授)